

山形県における白バラ会運動の展開について

On Development of "Shiro-bara Kai(White Rose Groups)" Movement in Yamagata

亀ヶ谷 雅彦

Masahiko Kamegaya

(要約)

本論文では、山形県における白バラ会運動の展開について概観した。新聞記事などから同運動の初期段階をまとめると、若者の投票率低下と青年団体の変遷の中で、新有権者政治学習講座修了者の組織化という一種の同窓会的な手法を用いて、その時代の潮流に見合った形で新たな青年層の組織化を狙ったものが、山形県における白バラ会運動の始まりであったと言える。

(キーワード)

山形県、米沢市、白バラ会、選挙啓発、政治学習

第1章 はじめに

1961(昭和36)年11月に厚生年金会館において行われた「公明選挙推進員全国大会」の舞台中央には、中央にバラをあしらった旗が飾られていた。翌1962(昭和37)年11月には「地方選挙公明化推進全国大会」で都道府県、5大市の公明選挙推進協議会の各代表者に紺地に白バラを染め抜いたデザインの「公明選挙推進旗」が手渡された。自治省の1963(昭和38)年衆院選ポスターにも、白バラのデザインが使われた(明るい選挙推進協会(編)2002 明るい選挙50年の歩み 明るい選挙推進協会)。

白バラはその清潔なイメージから公明選挙運動のシンボルとして使われてきた。その名前を冠した民間の選挙啓発団体が「白バラ会」で、現在でも全国各地で活動が続いている。

本論文では、戦後初の選挙啓発運動であった公明選挙運動に続く新しい形の選挙啓発運動として1964(昭和39)年3月に山形県米沢市で始まったこの白バラ会運動について、その初期段階(1971(昭和46)年ごろまで)に絞って経緯をまとめたい。

なお、本論文はH17年度山形県立米沢女子短期大学共同研究報告書「山形県農村部における教育活動の実証的研究(4)」(研究代表:松田澄子教授)の一部を再構成したものである。さらに詳細を知りたい方は是非同書を参照されたい。

第2章 白バラ会運動までの経緯

第1節 背景

最初に、「昭和43年度 明るく正しい選挙推進運動の手引き」(山形県明るく正しい選挙推進協議会・山形県選挙管理委員会)に従って、公明選挙運動以降白バラ会ができるまでの山形県内における経緯に触れたい。

1952(昭和27)年に始まった山形県の公明選挙運動以降、1954(昭和29)年に公選法が改正され、自治省及び選管に選挙の常時啓発事業を行わせることが定められ財源措置もなされた。1957(昭和32)年には「公明選挙常時啓発委託事業」が創設されて、その事業の中心は

「話しあい」の実施に置かれ、さらに啓発事業が国から各選管に委託された。1965(昭和40)年に「公明選挙運動」という名称が公明党と類似し紛らわしくなったため、自治省が名称公募を行い「明るく正しい選挙」と改称した。このため市町村においても順次、従来の「公明選挙推進協議会」から「明るく正しい選挙推進協議会(推協)」へと名称が改称された。この改名は、とかくマンネリ化しやすい運動を反省させる契機にもなった。

1965(昭和40)年9月には明るく正しい選挙推進全国協議会が結成され、1967(昭和42)年8月には財団法人明るく正しい選挙全国推進協議会となった。山形県内においても同年12月には山形県推協に市町村推協地区連合会代表が参加し、全推協と県推協、市町村推協の連携が保たれた。

第2節 新有権者政治学習講座

山形県選管は、1961(昭和36)年8月29日から31日までの3日間、新有権者を対象に「政治学習講座」を羽黒町の出羽三山神社県民講堂で開いた。この講座では、①三日間を規律正しい合宿生活として、整理、整頓の時間も設けた、②キャンドルサービスや映画鑑賞などレクリエーションを豊富に取り入れた、③講義の内容も二十才くらいの年齢に沿うよう(イ)新有権者に期待するもの、(ロ)共同研修の意義と方法、(ハ)成人と法律関係、(ニ)地方自治と選挙、(ホ)新聞の読書方法、(ヘ)郷土の歴史、(ト)明るい家庭生活をいとむには、などの日程が組まれていて、それまでの公明選挙研修講座などでは見られなかった新しい試みがなされたとされる(公明選挙時報 1961(昭和36)年8月号)。

それまでの公明選挙研修講座は1日限りで、選挙に関する講演や映画が中心だった。上に挙げた新有権者政治学習講座ではこれを合宿形式とし、選挙のみならず社会教育的な視点に立って幅広い内容を取り入れたのである。

第3節 白バラ会の始まり

「昭和43年度 明るく正しい選挙推進運動の手引き」では「白バラ会」の始まりについて、以下のようになっている。

県選管は1961(昭和36)年から毎年羽黒山で新有権者政治学習講座を開設していたが、この講座の修生を中心とした若い仲間「白バラ会」が、明るく正しい選挙推進運動を積極的に推進しようとして、県内各地に結成された。1964(昭和39)年3月に米沢市白バラ会が最初に結成され、次いで同年6月には朝日町白バラ会等次々と結成され、当時の段階で県内39団体約90%の結成率となっていた。

白バラ会は会員相互の政治、選挙に関する知識を高めるとともに、市町村選管、市町村推協、社教等と提携して自主的な啓発活動を行っていた。

1967(昭和42)年11月には初の白バラ会会長会議が天童市の県立青年の家で2日間開催され、白バラ会のありかた、今後の啓発の方向などについて研究討議し、あわせて白バラ会の相互交流を図った。その席上で白バラ会代表を県推協の委員に送ることとなり朝日町白バラ会会長が選出された。また会の相互交流及び組織力の強化を図るために地区別連合会を結成することが決定され、同年12月には最上地方白バラ会連合会が結成された。続いて1968(昭和43)年3月には西村山地方白バラ会連合会及び東南村山地区白バラ会連合会が結成された。

このような事情を承けて山形県の「昭和43年度選挙事務執行の方針と計画」でも、選挙啓発事務の項目の中で、明るく正しい選挙運動が、この「白バラ会」を中心として地域あるいは職域の中に巾広く進められるよう助長育成をはかり基礎的推進体制を強化拡大する、としている。

そして「昭和43年度選挙常時啓発事業概要」でも、白バラ会の育成や活用は事業計画の目玉の一つとして文章の各所にちりばめられている。

まず最初に、白バラ会を育成する2つの研修会が計画されている。すなわち、まず「第8回新有権者政治学習講座」を、各市町村から推薦された新成人者132名を対象に8月20日から23日の3日間、羽黒山の県民講堂において実施する。参加者には修了証書を授与するほか、白バラバッヂを贈呈する。さらに市町村から推薦された新有権者政治学習講座の修了生及び白バラ会員132人を対象として9月17日から19日の3日間、天童市にある県立青年の家に合宿して「第2回選挙啓発指導者研修会」が計画されている。このような二度の研修を通して、真に明るく正しい選挙運動の推進中核体となるべき人や、地域や職域のリーダーとしての白バラ会員の養成を図っていたようだ。

次に白バラ会の活動に関しては、白バラ会会長会議や白バラ会育成指導が計画されている。前者は各市町村白バラ会長44名を対象に天童市の県立青年の家で10月中旬に2日間開催するものだった。後者では白バラ会の話し合い活動に、少なくとも各市町村1回は講師を派遣することを計画している。事実、「昭和43年度月別事業計画書」では、4月から3月まで、すべての月で白バラ会の指導や育成指導、共同実施などがスケジュールに入っている。さらに、明るく正しい選挙都市宣言の推進についても、具体的には市町村推協と白バラ会が中心となって世論を盛り上げ、呼びかけることになっていた。また新有権者政治学習講座修了生及び白バラ会員に配布する白バラバッヂの作成にも予算がつけられている。

これ以外にも「白バラ会共同学習」として、県と市町村が共同して白バラ会の地区連合会を作成している地区を重点にブロック毎に共同学習を実施し相互研修に努めることが計画されていた。具体的には東南村山、最上、西置賜地区白バラ会の共同学習を実施することになっていた。

県選管のみでなく、県推協でも白バラ会の活用は考えられていた。県推協会長名で出された「本県の明るく正しい選挙の推進において」の中では、本年度事業の重点事項の二番目として、「2. 白バラ会を育成する。かかる救国的国民運動は、若い人々のエネルギーに期待する。白バラ会は本県独自の新方式で、やがて全国に『山形方式による白バラ運動』が展開されよう」と唱っている。そして常時活動においては白バラ会とは密接に連絡し、話し合いの会場設営、人集め等に協力を求めるとされ、選挙時の臨時活動においても、棄権防止運動に関して、選管に依頼して白バラ会員をできるだけ投票立会員に委嘱してもらうよう斡旋することが挙げられている。なお常時・臨時の活動については、しばしばブロック会長会議（白バラ会長も参加させる）を開き、最も効果的に共同実施をすることも掲げられている。

この文章の最後には「白バラ会について」という節が設けられている。そこでは「白バラ会員の中で優秀な活動家は、漸次推進協議会の委員に推薦してもらいたい。現在は会長1名が委員になっているが、将来は23名から34名はあってもよいと思う。白バラ会は県の主催する『はたちのつどい』のメンバーをできるだけ会員に獲得し、優秀な活動家を多く集めて、選挙を通じて地域の開発、明るい村造り運動を展開してもらいたい。白バラ会は推協の唯一の協力団体であるが、運動実施に当っては表裏一体の関係を保つよう、推協は特に留意してもらいたい」と述べられている。

山形県明るく正しい選挙推進協議会作成の「昭和43年度山形県明るく正しい選挙推進協議会事業計画」では、「ブロック別話し合い研究協議会（各地区別推協及び白バラ会会長会議年2回）」の予算が組まれている。ただし県推協の事業は会議開催や事業共催などに限られ、予算総額も約52万7千円にとどまっている。これに対して前述した「昭和43年度選挙常時啓発事業概要」の総額は258万円と桁違いに多い。

なお、ここで「白バラ会結成推進要領」を掲載しておく(表1)。これを見ると、白バラ会は政治学習講座修了者でなくても、運動に熱意がある者にも拡大することが既に明らかにされている。

表1 白バラ会結成推進要領

白バラ会結成推進要領

(4. 1. 6)

山形県選挙管理委員会

1. 目的

明るく正しい選挙運動を国民のものとして推進するため、民間の自主的な運動体制を確立することが肝要である。

このため、この運動を推進する中核体の組織拡大を図るため、県が昭和36年度から継続している新有権者政治学習講座の修了者を中核とした各市町村単位の「白バラ会」を結成することを促進し、これらの中核体の啓発運動に積極的な助成を行なうことを目的とする。

2. 白バラ会結成要領

- (1) 市町村の選挙管理委員会は、新有権者政治学習講座修了者に対して、白バラ会結成について積極的な働きかけを行ない、会員招集の事務手続き、会合のための場所の提供等のできるだけの援助を行なうものとする。
- (2) 白バラ会は、新有権者政治学習講座修了者が中心となって組織するものとするが、同年代のこの運動に熱意のある者を会員として拡大することも考慮するものとする。
- (3) 白バラ会は、会員相互の政治、選挙に関する知識を高めるとともに、市町村選挙管理委員会、明るく正しい選挙推進協議会、社会教育機関等と提携して自主的な啓発活動を行なうものとする。
- (4) 県は、白バラ会結成団体に対しては、その団体の要請により講師の派遣、啓発資料の提供等を行なうものとする。

(注 「昭和43年度明るく正しい選挙推進運動の手引」より)

第3章 報道に見る白バラ会運動の動き

第1節 新聞報道の状況

この章では新聞記事に見られる白バラ会の活動について概観したい。以前の公明選挙運動は、青年団と婦人会を軸に官民マスコミを挙げての活動であったために報道量も多かったが、白バラ会については相対的に報道量は少ない。それも全県的な購読者層を持つ山形新聞での報道は少なく、とりわけ運動初期段階では置賜地方の地方紙である米沢新聞の方が多く取り上げているようだ。

当時の米沢新聞は選挙啓発に熱心で、公明選挙運動の頃からしばしば記事として取り上げていたが、白バラ会運動の時期もたびたび社説で選挙啓発について取り上げ、米沢や置賜地方の白バラ会の運動についても比較的多く取りあげていた。そこで、本論文では主に米沢新聞の記事を用いて、米沢市白バラ会の動向を中心にして追ってゆきたい。ただし報道されるのは街頭パレードや大会、会合など表立った活動が大半で、時期的にも1967(昭和42)年のように選挙が連続的に行われる頃に報道量が多くなる傾向がある。

第2節 白バラ会の登場

前述したように、白バラ会は1961（昭和36）年度より行われていた新有権者政治講座の修了者の中からメンバーが集まって、1964（昭和39）年3月に始まったとされる。しかし、その活動が米沢新聞紙上に現れるのは、それから1年あまりたった、1965（昭和40）年4月である。社説「正しい選挙推進団体の誕生」の中では、米沢市公明選挙推進委員会が発展的解消して、新年度から「明るく正しい選挙」推進協議会を新たに結成することが書かれている。そして、同年6月の参院選挙を前に臨時啓発を行うことになり、市選管、市白バラ会とタイアップして5月3日の上杉祭り広告仮装行列に特別参加して「明るい選挙」「きれいな選挙」を一般有権者に呼びかけた。さらに5月29日には興譲小学校東グラウンドで「明るい選挙総参加推進米沢大会」を実施し、市中パレードをするほか、広告塔の設置、テレビ放送、立て看板、チラシ配布などによって買収、供応追放や棄権防止を促すと報じられている（米沢新聞 1965（昭和40）年4月29日）。このように、上杉祭りでのパレードの参加団体として、白バラ会の名前が初めて挙げたのである。

参院選後の6月28日の社説「若い世代の選挙公正化活動」では、白バラ会についての詳しい説明が書かれている。すなわち、「明るく正しい選挙」の手拭い千本を作って配布した米沢市連合青年団や、会長が明るく正しい選挙推進協議会委員に委嘱された米沢市内の商業青年の団体である「やまなみの会」の紹介と共に、白バラ会は、県が5年前から羽黒山県民講堂で開設している、その年成人式を迎えた県内の新有権者代表に対する政治講座に米沢市から受講した青年男女14人で昨春結成したグループで、こんどの選挙に際しては交代で市の広報車に乗って明るく正しい選挙や棄権防止を市民に呼びかけているとされた（米沢新聞 1965（昭和40）年6月28日、5月29日）。

その後、白バラ会についての報道は途絶えるが、翌1966（昭和41）年11月になると、米沢市白バラ会の話し合いが17日午後5時半から中央公民館で開かれることが報じられている（米沢新聞 1966（昭和41）年11月14日）。また知事選や衆院選を直前にした12月には、米沢白バラ会（遠藤宏三会長）が近く会員の集会を開き、選挙に備えてのポスター作成や広報活動など、推進策について協議することや、それまでも選挙時には市内各主張所^(マツ)単位に、ポスターを作成して配布するなどの活動を行っていたことを報じている（米沢新聞 1966（昭和41）年12月27日）。

第3節 1967（昭和42）年の動き

1967（昭和42）年は前年末の「黒い霧解散」を承けて年始早々から知事選と衆院選が実施され、続いて4月には統一地方選を迎えた選挙の当たり年であった。同年1月15日には「明るく正しい選挙市民決起大会」が開かれたが、共催団体の一つとして白バラ会の名前が見られる（米沢新聞 1967（昭和42）年1月6日、同1月13日、山形新聞 1967（昭和42）年1月16日）。米沢白バラ会の会員20人は、今度の衆院選が大雪のため投票率が前回より落ちたとなつては明正選挙の名に反くとあって「棄権せず全員投票しましょう」と、毎日全市内を駆け巡り、有権者にPRし感謝された（米沢新聞 1967（昭和42）年1月26日）。

統一地方選の前には、白バラ会は置賜地方の他の市町村へと広まっていく。3月24日には長井市役所で長井市白バラ会発会式が行われ、会長に田中実、副会長に板垣健一らを選んだ。この会には20人の青年たちが出席した（米沢新聞 1967（昭和42）年3月25日）。

一方、米沢白バラ会は、総選挙期間中有権者に対し違反や棄権防止など清く明るく正しい選挙の推進を呼びかけた功労が認められ、県選管から表彰されることが決定した。この記事では、米沢白バラ会結成時のメンバーが男子18人、女子6人だったことや、各種選挙ごとに

遠藤会長以下会員が手弁当で市選管に詰め手分けして白バラを配りつつ全市有権者に醜い選挙違反と棄権防止を呼びかけ、県下における白バラ会誕生のトップを切ったことが述べられている。また米沢市明るく正しい選挙推進協議会に対しても自治省から表彰の内報が市選管に入った（米沢新聞 1967（昭和42）年3月25日）。なお統一地方選を前に「明るく正しい選挙」を呼びかけ、米沢からは一件も違反のないように呼びかけることにしていることも報じられている（米沢新聞 1967（昭和42）年3月26日）。

県議選終盤の4月13日には寒河江市の婦人会、白バラ会の人たちが広報車を繰り出して各地区を回り、風船を配って違反一掃を呼びかけた（山形新聞 1967（昭和42）年4月14日）。5月14日には米沢白バラ会と寒河江白バラ会の交歓会が米沢市中央公民館で開かれ、統一地方選の反省などについてお互いに話しあうことにしていると報じられている（米沢新聞 1967（昭和42）年5月12日）。6月11日には、同年4月に発足した村山市白バラ会（会員10人）と同市で交換会を開き、将来は青年の声を結集した県連会合の体制作りを進めたいなど建設的な意見が出された。この時点で米沢白バラ会の会員は発足当時の十数人から24人に増えて、さらに満20歳以上の若者に同会への参加を呼びかけており、詳細は米沢市選管に問い合わせることや、同役員会では役員改選の結果、会長に佐藤正夫（窪田町）、副会長に佐藤忠次（上郷町）を決めたことも書かれている（米沢新聞 1967（昭和42）年6月13日）。

7月6日と9日には、米沢市白バラ会が米沢新聞に米沢市政刷新連盟主唱の浄化運動について賛同する旨の新聞広告を出す（1967（昭和42）年7月6日及び9日）。これは、これまでの活動内容とは異質の活動として注目される（表2）。

表2 掲載された新聞広告の内容

（1）米沢市政刷新連盟

声 明

市政の民主化市民の生活向上は明るく正しい選挙からスタートしなければなりません。今回の地方議会の選挙において数件の汚れた事実が摘発されたことは誠に遺憾であります。正しくない選挙は市民が政治に直接関与出来る唯一の機会を踏みにぢられたことになり民主化を破壊し市政の発展を妨げ大衆に不利益を与えるので社会的罪悪と言わねばなりません。

違反の当事者は裁判の判決まで時をかせぐと言う考えを捨て自らの良識によって進退を処さねばなりません。

政治は信頼を得ることであり道義が基本であります。疑惑を秘め良識が失はれて何の民主化も大衆の利益もありません。

市長選を秋に控え汚れた選挙の続発することを恐れ米沢の民主化を守り発展を期するため疑惑をうけた当事者は市民大衆によ

って鋭くその責任が追究されなければなりません

我々は先頭に立ってこの運動を推進する
ものであります

市民各位の絶大なる御理解御協力を賜り
度く御願ひ申しあげます

昭和四十二年七月一日

米沢市政刷新連盟

代表 横 山 智

米沢市門東町三丁目二番四〇号

(2) 米沢市白ばら会

声 明

今回の米沢市政刷新連盟主唱の浄化
運動について我々は双手をあげて賛
同致し各種団体にも呼びかけ共にこ
の運動を推進致すものであります

昭和四十二年七月五日

米 沢 市 白 ば ら 会

代表 佐 藤 正 夫

米沢市窪田町三、〇四八

(3) 山形県政擁護連盟

支 持 声 明

各新聞に提唱された米沢市政刷新連盟並に米沢市白バ
ラ会の市政浄化選挙粛正の運動に対し我が連盟は全面
的に之を支持し参加するものであります

安部又右ヱ門議員は本人並に責任者が実質犯に問はれ
たのでありますから裁判の判決を待つまでもなく道義
を良識に従って進退を決めるべきことを強く要求致し
ます。我が連盟は今後も敢て当事者を指摘しその責任
を追究し民主化を守り違反根絶する運動を進めるもの
であります。

市民各位の御協力をお願い申し上げます。

昭和四十二年七月五日

山 形 県 政 擁 護 連 盟

会長 西 牧 政 雄

米沢市城北一丁目二番十四号

(4) 共同推進本部

共同推進本部設置

市民各位より連日多数の御激励御指導を賜りまして厚く御礼申し上げます。この運動支持の各団体は更に協力かつ広範に推進する為め左記に共同推進本部を設けることに致しましたのでお知らせ申し上げます。我々は皆様と共にこの運動をあくまでも続けるものであります。

昭和四十二年七月八日

米沢市丸ノ内二丁目三番二十二号

全織同盟事務所内

電話③一六三二四番

(注 原文は縦書き、(4)については1967(昭和42)年7月9日のみ、それ以外は7月6日と9日の米沢新聞に掲載された)

この意見広告と同時に出された米沢市政刷新連盟や山形県政擁護連盟の意見広告の内容を合わせて考えると、ここで白バラ会が問題としたのは、同年4月の統一地方選の際に行われた米沢市議選で当選した安部又右衛門候補の出納責任者が運動員に現金を渡し票の取りまとめを頼んだ疑いで4月29日に逮捕され、5月5日には安部市議自身も事前運動と供応の疑いで逮捕された事件であると思われる。安部市議はその後処分保留のまま釈放されたが、翌年1月に出納責任者は公選法違反で起訴され、運動員9名も同月略式裁判の結果、罰金刑と公民権停止処分を受けた(米沢新聞 1967(昭和42)年5月1日、7日、31日、1968(昭和43)年1月7日、28日)。意見広告からは、この件に対して共同推進本部が作られていたことも分かる。1971(昭和46)年までの間の米沢白バラ会において、新聞紙上で唯一の主體的と思われる意見表明がこの事例であった。

同年11月の米沢市長選には、郷土出身の俳優だった伴淳三郎が応援のため街頭演説に立つなどしたが、白ばら会の活動は報じられていない。

12月の新聞記事では、天童市の県青年の家で2日間に渡って白ばら会長会議が開かれた(日時不明)ことが報じられている。なお、その記事の中では白ばら会は30市町村、約600人の会員に増えたとされている(米沢新聞 1967(昭和42)年12月1日)。

第4節 1968(昭和43)年の動き

1968(昭和43)年に入ると、県内の白バラ会の組織化が進んだ様子が見えてくる。同年1月23日(注 記事中では「三十三日」と誤植されている)には、東南置賜地方市町の明るく正しい選挙推進協議会長と白ばら会会長の初の合同会議が米沢市の松岬会館で開催された。この合同会議は6月の参院選に対して明正選挙運動を効果的に進めるために2市2町の推進協と同協議会の構成メンバーである白バラ会が意見を交換するもので、高畠町推進協の五十嵐佐恭会長や米沢白バラ会佐藤正夫会長ら17人の関係者が出席した。そして同月29日に開く県主催の推進協委員研修会を充実させるにはどうすればいいかについて協議し、研修会は単に講師の話聞くだけでなく具体的な経験談を披露しあう方式をとることにした。この会議ではまた、東南置賜2市2町の明るく正しい選挙推進協議会の間で連絡協議会が結成された。これによって明るく正しい選挙推進協議会における相互の連絡提携を図るとともに、研

研究会や講習会を開催して運動を促進させることになった（米沢新聞 1968（昭和43）年1月20、27、28日）。

2月には、山形県明るく正しい選挙推進協議会会長の片岡潔による「参院選の啓発運動」が紙上に発表されているが、ここでは組織の改善や啓発運動の項目で、白バラ会について触れられている（米沢新聞^(マツ) 1968（昭和43）年2月2日）。すなわち「組織の改善」の項目では「二・新有権者研修会 終了者をもって、市町村毎に『白バラ会』を結成させ、啓発活動の実戦部隊とする。全県下に組織結成済み。目下県内八ブロック結成中。」「四・市町村推協と『白バラ会』は、地方事務所単位にブロックの協議会を持ち、地方事務所総務課でブロック内の両団体に助言と、連絡のサービスを行う。県の指導はブロックに重点を置く。」「五・選挙に際しては白バラ会員を投票管理者に推薦する。」とされている。啓発事業の項目でも、「一・市町村推進委員、白バラ会員は年一回、必ず話し合い活動を実施する。この費用は一会場三百円から五百円を推協で負担する」「二・模擬市町村会を婦人会白バラ会、青年団とうで開く。」と述べられている。このように、啓発活動の実戦部隊として、県内の白バラ会をブロック毎に組織化し、話し合い活動や模擬議会を実践させようという意図がこれらの文章からうかがえる。

3月には、前年に合併した南陽市での初めての市議選が行われたが、この際に、市明るく正しい選挙推進協議会と白バラ会は選管と共に違反のない選挙をしようとポスターを貼って有権者に呼びかけた（米沢新聞 1968（昭和43）年3月14日）。

4月には米沢白バラ会が総会を開き、役員改選の結果、佐藤正夫を会長に、佐藤忠次を副会長に再選し、年間行事を打ち出したと報じられている（米沢新聞 1968（昭和43）年4月23日）（表3）。

表3 1968（昭和43）年度の米沢白バラ会の年間行事

5月	講座（米沢藩の特徴について、郷土史研究家、岡博氏）
6月	交歓会と話しあい（南陽市白バラ会との交歓、市内の同世代グループとの懇談）
7月	参議院議員選挙の啓発
8月	交歓会（東根市白バラ会と交歓、出羽三山での指導者研修会に出席）
9月	新会員迎え話しあい
10月	映画鑑賞と話しあい
11月	選管事務局長を囲み選挙法についての解説を聞く
12月	話しあい
1月	新年の心構えを検討
2月	交歓会（市内友好団体を対象）
3月	総会（新年度の事業計画樹立）

（注 米沢新聞 1968（昭和43）年4月23日より作成）

これを見ると選挙時の啓発活動以外にも、毎月様々な行事が計画されていたことが分かる。「話しあい」とは、公明選挙運動における共同学習以来の政治学習の手法で、生活や社会の問題についてお互いに討議することである。他にも南陽市や東根市の白バラ会と交歓会を行ったり、夏の新成人政治学習講座に出たりしている。9月になると新会員の入会時期となり、さらに郷土史の講義や映画鑑賞など、選挙と直接関係ないレクリエーション行事も見ら

れる。このようにレクリエーションも含む様々な活動を白バラ会が計画していたことは、各種活動の一つとして公明選挙運動を扱った青年団の取り組み方と、似ているといえよう。

白バラ会の活動は、全国にも報告されることになる。6月10日に東京麹町会館で開かれる全国明るく正しい選挙推進協議会には各県から選ばれた代表2名が出席することになっていたが、山形県代表の1人に米沢白バラ会会員の本田朝子が選ばれ、当日意見を述べることになった(米沢新聞 1968(昭和43)年5月29日)。既に公明選挙連盟の機関誌「私たちの広場」1967(昭和42)年6月号の「推進事業の効果的手段について」という記事の中で、山形県推協会長の片岡潔が白バラ会の立ち上げについての経緯を紹介しているが、これらを契機として、白バラ会は山形県以外でも組織されるようになる。

6月になると、翌月に投票日を控えた参院選の啓発運動として、白バラ会の会員が活動している。そして6月7日には、米沢白バラ会が会員を募集しているとの記事が掲載された。この記事では同会が明るく正しい選挙の推進により、政治的教養を高め最終的には英国のような立派な議会政治の国づくりに努力しようとする満二十才の人々の団体であること、会員は出羽三山で開催される政治学習講座に出席するが、二泊三日で旅費不要だったこと、表3で述べたような活動内容だったこと、会費が年間400円であること、希望者は米沢市役所内選管事務局宛に申し込むこととなっていたことなどが分かる(米沢新聞 1968(昭和43)年6月7日)。

18日には東南置賜地区明正選挙連絡協議会、各市町選管、白バラ会主催による「白バラ娘」のパレードが行われた。各地区から選ばれた白バラ娘4人を含めた13人の関係者は6台の自動車に分乗して地方事務所前をスタートし、米沢市役所前でマッチやチラシを配るなど街頭啓発運動を行った後、高島町、南陽市、川西町へと巡回した(米沢新聞 1968(昭和43)年6月6日、19日)。6月30日には、米沢白バラ会と米沢市青年連絡協議会(9団体)が街頭でチラシを配布し、白バラ会を含む若い世代の青年たち900人の会員が白バラの造花をつけ市内目抜き通りに繰り出して呼び出すこととなった(米沢新聞 1968(昭和43)年6月28日)。

第5節 1969(昭和44)年以降の動き

1969(昭和44)年1月には、長井市、白鷹町、飯豊町、小国町の1市3町の白バラ会の会員が200人に達したが各市町が個々バラバラに啓蒙を続けてきたのでは効果が上がらないとして、西置賜地区白バラ会連合会を結成し大会宣言をしたり、会長の小形安弘(白鷹町)ら役員を選んだ。運動方針では3月の飯豊町長選に連合会でキャラバン隊を送り明正選挙を呼びかけ、また定期的に会員が集まり共同学習するなどを決めた(米沢新聞 1969(昭和44)年1月31日)。

2月7日には高島町で模擬町議会が開かれたが、この議員として婦人会から13人、白バラ会3人、青年団から14人を選出することが報じられた(米沢新聞 1969(昭和44)年2月4日)。3月15日の米沢新聞社説「政治意識の常時啓発」では、米沢市の推進協は、各地区公民館長、市連合婦人会、小、中学校校長会長、市連合老人クラブ、青年会議所、市連合青年団、やまなみの会、白バラ会の各代表、学識経験者など28人で組織されていたことが分かる(米沢新聞 1969(昭和44)年3月15日)。

3月には、置賜3市5町の白バラ会で新年度から新たに「白バラ友の会」を結成し、機関誌の読者数を増やすなど組織作りを強化することになったと報じられている。白バラ会は県下各市町村からリーダーを選抜して合宿の講座を終えた青年たちが引き続き学習しながら一般への呼びかけにも一役買っていきこうと結成したもので、市町村の指導、助成でそれぞれ活動しているが、講座はこれまでに7回終えただけなのでメンバーは20人から25人程度と少な

く、さらに助成といっても学習会の講師、資料の斡旋などのための活動資金は会費に限られ思うように動きのとれない実情に対して、このためせかくの若い主張が生かされぬとこの改善案が台頭していた（米沢新聞 1969（昭和44）年3月18日）。

6月19日には米沢新聞社説「白バラ会活動を激励」が掲載され、県や市町村に設けられた推進協議会の実戦部隊としての白バラ会の位置づけや、鶴岡市を除く県内43市町村で結成されていることが書かれている。さらに、飯豊町の白バラ会の事例が詳しく取り上げられている。飯豊町では1968（昭和43）年5月に選管が音頭を取り白バラ会結成を呼びかけたが、対象者が少ないのと、年度途中で予算がないので計画が組めず、中部地区公民館の青年学級に協力を求めた。同学級は昨年6月5日に白バラ会結成総会を開き123人の会員で発足した。そして郡内の研修会に会員を派遣したり広報活動などに参加して来たが、1969（昭和44）年3月に青年学級の修了式とともに学級生が散ってしまったので、白バラ会も自然消滅し、一年も経たないうちに事務局があっても会員のいない有名団体になってしまった。同記事はこの事態に対して発足そのものに無理があったのではないかと考え、町選管が他市町村に遅れては困るというあせりが出て組織させた天下りのものではなく、青年の下からの盛り上がりによる自主的なグループとして、力強い白バラ会が復活することを望んでいる（米沢新聞 1969（昭和44）年6月19日）。このように、県や市町村選管や推進協議会による上から白バラ会組織化は、必ずしもいつも成功したとは限らなかった。

7月30日の記事では、9回目を迎えた出羽三山の政治学習講座について紹介されている。これは県選管が新有権者を対象に毎年夏休みに開いているもので、全国で一番早く開催され、これまでの8年間に1000余人の受講者を出した。今年の新有権者のつどいは来月14日から16日の3日間、出羽三山の県民講堂に市町村ごと3人ずつの満20才男女132人が参加する。受講者たちは各地に白バラ会を結成し、来月には白バラ会代表者会議を開き、常時啓発運動のほか、予想される衆院解散・総選挙に備えての運動も話しあう。受講者達は、自主的に話し合い活動が続けているほか、各種選挙では棄権防止の呼びかけ、公営選挙ポスター掲示場作りと選挙後の清掃、投票・開票立会人への積極的な参加をしている。法改正により今後選挙人名簿は住民登録さえすれば自動登録されるようになったが、これまでの申出制では若い層の未登録率が圧倒的に高く、6月20日現在の確定名簿では満20才の登録率は県平均56%だった。このため県推協などは啓発の重点を若い層におき、白バラ会を核に運動を進めようとしていた（米沢新聞 1969（昭和44）年7月30日）。

12月1日には白バラ会の機関誌「白ばら山形」が創刊された。各地区に白バラ会が設けられたが、まだ県内をひとつにまとめた組織がないので、互いに交流しあう機会がなく、せめて活動の推進役となる機関誌だけでも計画され、今度の総選挙に間に合わせようと米沢白バラ会の佐藤正夫、山辺町の樋口キクらが中心になって呼びかけ、タブロイド判半分、16ページの創刊号が出来上がった。中には、県明るく正しい選挙推進協議会の片岡潔会長の提唱、会員の意見、地区ごとの活動のあゆみ、選挙関係の新聞記事などが掲載された2000部を印刷し、千人あまりの会員の他、市町村の運動担当者に配るが、年4回くらい定期的に発行し、会員の「声の広場」にしようとしていた（米沢新聞 1969（昭和44）年12月3日）。

この12月には衆院が解散され師走選挙となったが、これに先だって出された「七者声明」の中に県白バラ会も入っている（米沢新聞 1970（昭和45）年1月20日）。また南陽白バラ会（会員30人）が総選挙の棄権と違反防止に市内50カ所に会員が描いた啓発ポスターを貼ったことが報じられている。さらに総選挙期間中は会員たちの自家用車で市内全域をまわり周知することになっていた（米沢新聞 1969（昭和44）年12月22日）。

1970（昭和45）年では、8月11日に川西町で開かれた模擬議会の模擬議員として白バラ会

からも参加者があったことが報じられている（米沢新聞 1970（昭和45）年8月6、12日）。10月10日には、河北町長選で同町の白バラ会が合同の個人演説会を開催した（私たちの広場 1971（昭和46）年2月号）。11月には翌月に迫った知事選の際に、会員30名となった米沢白バラ会（五十嵐謙一会長）でも米沢市の基本計画に合わせ、啓発キャラバン隊による市内の巡回、大手商店内のスピーカー利用による棄権防止の呼びかけ、事業主に対し公民権の時間を従業員に与えるよう要望する、マンガによる啓発を計画した（米沢新聞 1970（昭和45）年11月14日）。

第4章 おわりに

以上、山形県における白バラ会運動の萌芽期の活動について、新聞記事などを元にしてその経緯を概観してきた。

これまで見たように、白バラ会が生まれるきっかけとなったのは山形県選管が1961（昭和36）年8月に新有権者を対象として開催した「政治学習講座」であった。以後、毎年同講座が開催されたことによって人数が増えた修了生たちの中から、1964（昭和39）年に米沢市白バラ会や朝日町白バラ会が結成され、県下の市町村へも広がったのだった。

前に述べたように、新聞記事となるような白バラ会の活動は、街頭パレードや大会・会合、選挙時の啓発活動など表立った活動に留まる傾向がある。しかし米沢市白バラ会の年間行事を見ると、選挙時の啓発活動以外にも「話しあい」のほか、他団体の交流会や郷土史の講義、映画鑑賞など、選挙と関係ないレクリエーション行事も含め、様々な活動がなされていたと考えられる。

そして1968（昭和43）年になると、白バラ会の育成や活用は、山形県の選挙常時啓発事業の目玉の一つとなった。県内の白バラ会の組織化が進む一方で、県推協会長の発言からは、白バラ会を啓発活動の実戦部隊として組織化し、話し合い活動や模擬議会を実践させようという意図も見られるようになった。そして1969（昭和44）年末には県内白バラ会の交流を図るべく、機関誌「白ばら山形」が創刊された。しかしながら一方で、飯豊町の例のように、県や市町村の選管や推進協議会による、上からの白バラ会組織化は必ずしも全て成功したとは限らなかった。

白バラ会が結成される時期はちょうど高度経済成長期の頃にあたり、公害や政治腐敗が政治問題とされた時期であった。また政党の多党化が進む時期でもあり、たとえば公明党の登場によって、選挙啓発運動の名称が「公明選挙」から「明るく正しい選挙」へと変わる時期でもあった。そして、選挙啓発運動の矛先も「ボス政治打破」から棄権防止や若者の投票率増加、金権選挙への批判へと移り変わっていた。さらに、婦人会と並んで公明選挙運動の主たる担い手であった青年団の活動が停滞してしまったために、選管や推協には、これに代わる新たな青年団体を組織する必要があった。

このように、若者の投票率低下が社会問題となり、また青年団体が変遷する中で、新有権者政治学習講座修了者の組織化という一種の同窓会的な手法を用いて、その時代の潮流に見合った形で新たな青年層の組織化を狙ったものが、山形県における白バラ会運動の始まりであったと言える。